

『榻嶋曉筆』説話の論理展開の方法と配列

— 卷一を中心に —

小 椋 愛 子

一、はじめに

これまで、『榻嶋曉筆』の説話の出典を探り、その受容と変容のあり方を考えてきた。そして、各説話が典拠を有しながらも、その巻の表題にあわせた解釈をおこなっていること、新たな事柄を付加するなど、独自の読みを展開していることを指摘した。『榻嶋曉筆』は、雑纂的な説話集といわれ、他の説話集、類書とも巻の立てかたは異なる。しかし、巻の構成の意識は高かったと思われる。

また、前稿で、『三国伝記』との関わりを論じ、『太平記』、『発心集』と重なりを示しながら、『三国伝記』に同話、同類話がある場合、『三国伝記』を主に採り、それらの中では『三国伝記』を重視していること、そして、必ずしも、古い説話を重んじている訳ではないことを論じた。

さて、『榻嶋曉筆』を概観したとき、仏教、中でも「法花本門」の語が多く目に付く。本稿は、これまでの経過をふまえながら、各説話の方法Ⅱ論理展開と、その巻の中における説話配列について考察したい。各説話の方法と巻の中における説話配列は相関性があるのではないか。さしあたり、巻一を中心にみていくことにする。

二、説話の方法―第四「国土ノ起」を中心に

卷一は、一・戯実、二・生死、三・仏法前後、四・国土ノ起和漢仏家、五・衆生、六・字源、七・詩初、八・歌起、九・教起の九つの説話群からなる。第一の「戯実」は、清少納言の『枕草子』を意識した構成をとり、少し趣を異にする。しかし、第二は生死の起、第三は「仏」と「御法」はどちらが先にできたかを明らかにするため、それぞれの起源を説くもの、第五は「人」の起り、第六、七、八は文字、詩（絶句）、和歌の起り、第九が如来説法の起源を説く内容となり、第一以外は全て物の起り、いわゆる起源譚である。ここでは一説話の方法をみていく。どのような論理構成を持つのか検討したい。大まかにいえば、仏教思想をもって統括しているのではないか。具体的な例として第四「国土ノ起」を取り上げる。この「国土ノ起」も、世界の始まりについて説く。標題に「和漢仏家」とあり、まず、冒頭で、

又国土の成立をいふに付て、和漢両朝並に仏家の所談相かはれり。^①

と、国土の成立における諸説を挙げることを提示し、「和漢両朝並に仏家」として、神道、道教、儒教等を和漢両朝の思想としてまとめるのに対し、仏教のみは、仏家と明示し他と区別する。（以下、提示の説を「神道」「道教」「儒教」の思想としてその語を用いるが、その内容が正しいかどうかは別として、ここでは『楊鳴曉筆』がそのように分けているとして扱ふ。）そして、

先和国神道の心天地開闢の初を尋ぬれば、当初天地いまだ開ず、陰陽いまだ別れざりし時、乾の方に鶏の子のごとく

なる渾沌たる物あり。……

と、「先」とし、最初に「和国神道の心」として「神道」の見解を述べる。「尋ぬれば」と問題提起をし、天地の起こりを説く。「尋ぬれば」のあと、天地開闢として「これより始て大八洲の名をこれり。」まで『日本書紀』などで有名な神代の説話が続く。そして、この後は、「大八洲」に導かれ、日本の名称の由来を語る。全体が二つに分かれる。先の「天地開闢」でも神の名前に導かれて、その説明が入るなど、説明の付加が目立つ。この部分を市古貞次氏は、『日本書紀』を出典とする。しかし、『日本書紀』にはない記述が二箇所ある。一つが天神七代を五行にあてはめる

いはゆる国常立尊木火土金水の徳をそなへ給へり 国狭槌尊水徳、豊斟淳尊火徳、泥土煮、沙土煮尊木徳、大戸之道、大戸間辺尊金徳、

面足惶根尊土徳、伊弉諾伊弉册尊五徳合て万物を生。

と、それに続く説明

然に始の五柱の神は五行の精にて、其形顕れ給はず。面足尊よりして人の形備り給ふ故に、面足とは申侍る也。

……五行の徳を各顕し給ふ方を六柱の御神と申計なり。二世三世の次第を立べきに非ずともいえり。

の箇所。そして、もう一箇所が後半の国の名称の由来を説く箇所の一つ。大和の地名のいわれを説く

此名中洲なる上神武天皇東征より代々の皇都となりし故也。又大和を昔は耶麻土と書。これは天地分れし初泥うるは

ひいまだかはかざりし時、人みな山をのみ往来して其跡おほかりければ、山迹と云心なり。或は古語に居住山といふ。山に居住せしにより山にとゞまると云心なり。

の箇所である。初めの天神七代を五行にあてはめることは清原宣賢筆の『日本書紀抄』に

第一 國常立尊 此神ハ無名之名無状之状ナリ……在レ天元氣之元……天地開闢以來今日至テ不_レ變_レ常_レ住_レ也……

第二 國狹槌尊 在レ天元氣水德_レ神 在レ地一德元水ノ神 在レ人腎元靈ノ神

第三 豊斟淳尊 在レ天元氣火德_レ神 在レ地二儀元火ノ神 在レ人心元靈ノ神……

第四 泥土煮尊 沙土煮尊 在レ天元氣木德_レ神 在レ地三生元木ノ神 在レ人肝元靈ノ神……

第五 大戸道尊 大苦邊尊 在レ天元氣金德_レ神 在レ地四殺元土_レ神 在レ人肺元靈_レ神

第六 面足尊 惶根尊 在レ天元氣土德_レ神 在レ地五鬼元土_レ神 在レ人脾元靈_レ神 以上水火木金土ト次々

リ 神皇實錄云 件五代云雖レ有ニ名相未レ現ニ形體……神皇正統記云此諸神實國常立一

神御座ナルヘシ・五行徳各々ノ神ニ頭給・此六代トモ計ル也・二世三世次第非レ可レ立云々

第七 伊弉諾尊伊弉冊尊 此二於テ始テ陰陽交會ノ道アリ……

とあり、又、『神皇正統記』にも

夫天地未レ分ザリシ時、混沌トシテ、マロガレルコト鷄子ノ如シ。ク、モリテ牙フクメリキ。コレ陰陽ノ元初未分ノ一氣也。其氣始テワカレテキヨクアキラカナルハ、タナビキテ天ト成リ、ヲモクニゴレルハツギキテ地トナル。其中

ヨリ一物出タリ。カタチ葦牙ノ如シ。卽化シテ神トナリス。國常立尊ト申。又ハ天ノ〔御〕中主ノ神トモ號シ奉ツル。此神ニ木・火・土・金・水ノ五行ノ德マシマス。先水德ノ神ニアラハレ給ヲ國狹槌尊ト云。〔次ニ火德ノ神ヲ〕豐斟尊ト云。天ノ道ヒトリナス。ユヘニ純男ニテマス〔純男トイヘドモソノ相アリトモサダメガタシ〕。次木德ノ神ヲ泥土〔浦鑿反〕瓊尊・沙土瓊尊ト云。次金德ノ神ヲ大戸之道尊・大苦邊尊ト云。次ニ土德ノ神ヲ面足尊・惶根ノ尊ト云。天地ノ道相交テ、各陰陽ノカタチアリ。シカレドソノフルマイナシト云リ。此諸神實ニハ國常立ノ一神ニマシマスナルベシ。五行ノ德各神トアラハレ給。是ヲ六代トモカゾフル也。二世三世ノ次第ヲ立ベキニアラザルニヤ。次ニ化生シ給ヘル神ヲ伊弉諾尊・伊弉册尊ト申ス。是ハ正ク陰陽ノ二ニワカレテ造化ノ元トナリ給フ。〔上ノ〕五行ハヒトツツノ德也。此五德ヲアハセテ萬物ヲ生ズルハジメトス。

と類似した記述がある。さらに『塵添瑿囊抄』卷六・第一「天地七代事」も

……仍此神ヲハ五行ニモ當定メ奉サル者也。後ヨリ五代。次第二五行ニ現シタル也。謂ク國狹槌ノ尊ハ水德ノ始。泥土瓊ハ木德ノ始。大戸之道。大戸間邊ハ金德ノ始メ。面足槿根ハ土德ノ始也。此ノ五德ノ五行ニ開タル所ヲ。天ノ御中主ノ尊ト申ス。

と、五行に例えた記述がある。

国名の由来、「大和のいわれ」については、一条兼良の『日本書紀纂疏』に

…故百姓往ニ來於山一、山多ニ人跡ニ、又云、耶麻止猶ニ山止一也、古語謂ニ居住ニ爲レ止、又云、百姓住レ山爲レ戸、故名

曰三山戸一、以上二義、大同小異也：(中略)：神武皇帝、初都二於大和國磐余之地一、因以三耶麻止一、爲下有二天下一之號上……

とみえ、又、『神皇正統記』にも

今八四十八ヶ國ニワカテリ。中州タリシ上二、神武天皇東征ヨリ代々ノ皇都也。ヨリテ其名ヲトリテ、餘ノ七州ヲモスベテ耶麻土ト云ナルベシ。……

……耶麻土ト云ヘルコトハ山迹ト云也。昔天地ワカレテ泥ノウルヲヒイマダカハカズ、山ヲノミ往來トシテ其跡ヲホカリケレバ山迹ト云。或古語ニ居住ヲ止ト云。山ニ居住セシニヨリテ山止ナリトモ云ヘリ。……

とみえる。この二箇所の記述は、『榻嶋曉筆』の独自の解釈ではなく、このような土壌、いわゆる「中世日本紀」の影響を強く受けた説といえる。この時代の日本紀の思想を反映する。「神道の心」の説は、『日本書紀』の正文を中心にまとめるが、それに注釈を交え、一部、異説「一書に曰く」の説をも採用する。正文を中心にまとめること、そして、その解釈を交えることも「中世日本紀」の影響か。

そして、「次」として今度は

次儒家の心は混沌を元氣とす。これ即天地陰陽いまだ分ざる前は、清濁相和す。爰を混沌といへり。……故に天地万物は混元の氣を本とす。されば氣形質の三を立る中に、混元を氣といひ、天地の起るを形と云、人民生じ五常の起るを質と名付也。……

と、「儒家の心」、儒教の立場から見解を述べる。「次」として、形式上、先の説に対して並列の形で説を提示する。それを「これ即天地陰陽は：爰を混沌といへり。」と、前の語、「混沌、元氣」を解説する体で論を進める。この「混沌」の語は、先の「神道」の説でも挙げられていた語である。神道の説とのつながりをほのめかす。そして、「されば」として、気形質を説く。そして、その儒家の見解を（二字下げの）別記の形式を用いて、

仏家よりこれをいはゞ、混元とは風輪所起の処に当れり。故に成劫の初これ氣の重也。次に形といふは成劫の初中、質と云は成劫の末、住劫の初なるべし。

と、仏家の立場で言い換えて説明する。「仏家よりこれをいはゞ」とし、「故に」として「儒教」の語を仏教の語で置き換える。「気形質」の三つを「四劫」にあてはめて説明する。「四劫」とは、仏教の時間論で一つの世界が成立し、継続し、破壊し、次の世界が成立するまでを、四期（①「成劫」＝器世間（山河・大地・草木等）と衆生世間（生きものの世界）が成立する時期で二十小劫に分かれる②「住劫」＝（先に挙げた）二種の世間が安穩に続く時期で二十小劫に分かれる③「壞劫」＝衆生世間がまず破壊し、ついで器世間も破壊しつくす時期で二十小劫に分かれる④「空劫」＝すべて破壊し終つて無一物であるから空劫という。二十小劫ある。）に分類したものである。あてはめて説明することにより仏教思想の中に儒教の理論を含んでいることを暗に示す。ここでの「仏家」の説は、四劫の思想を用い、小乗仏教の解釈である。いままで各思想の説で、「語」に対して加えてきた注の形をもって、ここは他の思想である仏教の語に置換する。「儒教」の説を否定、批評するのでなく、「置き換える」ことで、仏教の思想に、儒教の思想が含まれていることを本文の順を追う形で証明する。

そしてまた、「次」を用いて

次に道教の心は虚無の大道、生成養育して道法自然に元気をなす。故に道一を生ず、其一といふは混元なり。一これ大極也。一二を生ず、二といふは天地也。二三を生ず、其三と云は三才也。三万物を生ず、故に万物根に帰して虚寂に復すといへり。……

と、「道教の心は」として、道教の考え方を提示する。「次」としているから、ここでも並列の形で提示である。「故に」として、三つにあてはめて解釈する。たしかに「一が二を生じて三が万物を生む」との説明はまちがいはいえないが、この三つにあてはめること、そして、それが儒教の説で提示した「元氣」の解釈であることは、作爲的である。「くはしくは尽すにあたはず。」とし、それをまた別記の形式で

仏家よりこれをみれば虚無の道といふは空界なり。一を生ずと云は風輪なり。二は山海大地、三は人也云々。惣じて俗積の心無極にして大極也。是混元也。……二氣の交感にして万物生じ、万物生じて終に無極に帰すといへり。

と、先の別記文と同じ「仏家よりこれをみれば」の形を用いて「仏家」の立場で言い換える。ここも「儒家」の場合と同じく、本文に対応する形をとり、用語の置き換えをもつて仏教で言い換える。「道教の心」で三つに分けて説くのは、この置き換えのための伏線であったといえる。また、「儒家」の説で提示した「元氣」の語を用いることで、「儒教」と「道教」の相互の関係、それに対する仏教とのつながりを強調する。本文と対になる形で、本文の解釈となり、ここも仏教が道教思想を包括するため、仏教の語で置き換え可能であることを示す。そして、陰陽についての説明をも加え、本文の理解をも補う。

そして、いよいよ仏家の説の提示となる。

次仏家に付て且小乗の心をもていはゞ、一切衆生の三毒三業をもて器界を造立し、成住壞空の四相循環して各廿劫あり。……

と、ここでも「次」とし、形式上、いまままでと同様、並列の立場で扱う。仏家の中でも「小乗の心」として、別記の形式で言い換える際に用いた「成住壞空」の四劫や、風輪の思想を語釈を交え、具体的に述べる。いまままで別記の形式で述べた説の根拠、説明となり、四劫の論の総括となる。「くわしくは如三俱舎」と出典を明記したあと、

私云、神道の心天神七代の中の初の六代は空劫に当り第七代二柱神天浮橋の上にして逆矛を下し給ししだ、り国となると云より、成劫歟。……次儒家に混元の氣と云は風輪所起の処也。爰を道教に道一を生ずといへり。又道教に虚無といふは空界をいふときこへたり。

と、唯一、別記の形式を用いて説明しなかつた「神道」の説を、四劫の順序に照らして解釈する。つまり「神道」思想をも仏教が内包し包括することを示す。そして、これまでの神、儒、道の順に従い、それに対比する形でもう一度、諸説が「四劫」説で説明できることを強調する。また、儒教の混元の氣を風輪所起にあてはめ、さらに「爰を道教に道一を生ずといへり」と、道教の語にもう一度あてはめて説明し、三者の密接な関係を示す。これは、前説で用いた語を意図的に引く方法と重なる。それはまた、仏教がその全ての思想を包括していることの立証、強調となる。諸説に対し、別記の形式で述べてきたことを、再度まとめる。ここにいたって、冒頭で「和漢兩朝並に仏家」と、神、儒、道教を「和漢兩朝」と一括りにした意図が明らかになる。

この「私云」の部分には、『榻嶋暁筆』二十三巻本・二十巻本は、別記形式をとらないものの、抄本は別記の形式を用いて

いる箇所である。このように総括した上で、さらに

次実大極妙の法花本門の心は本国と妙所撰の三千界なれば……

と、いままでと同じく「次」の形式で、仏教の中でも大乘の教え、なかでも「法花本門の心」の立場での見解を述べる。そして、「故に本門の心よりみれば此界成立の始なし。」と、この話全体を結論づけ、統括する。ここでの見解はいままで分量の五分の一ほどである。にもかかわらず、これまで諸説を挙げ、それを仏教（小乗）でまとめてきた解釈を、ここで超越する形で覆す。「実大極妙」としていることから、「法花本門の心」の見解を重要視していることがわかる。この「本門の心」の論理展開を詳しく見ていきたい。

一話の中では、諸説の理論を超越して統括し、全体の結論部分になる。

初めに、「次実大極妙の法花本門の心は」と「実大極妙」として「法花本門」を強調する。「本国と妙所撰の三千界なれば、娑婆即常住本有の国土にして火水風の三災をはなれ、成住壞空の四劫を出たるが故に」と今までの論の中心だった「四劫」の思想を超越する体で、法華経でいう「久遠実成」の思想を提示する。そして「久遠実成」を前提にして「過去を尋るに生ぜし始なければ感ずる事なく、**未來**又終なければ生ずる事もなし」と、過去、未來として、時空を対比して、「久遠実成」の正当性を導く。次に「**されば**花藏密嚴等の浄土も安養淨瑠璃等の世界も乃至一代経に説ところの三土四土の浄土はみな此娑婆の根本より出生する処の枝葉垂迹の権土也。」と「されば」と前を受け、「花藏密嚴等の浄土」を「枝葉垂迹の権土」と定義し、他の宗派の理論も自らの「久遠実成」の論理に引つ張り込む。他の理論を対比することで、より「法花本門」の思想が優れていることを強調する。そして、「**故に**本門の心よりみれば此界成立の始なし。」と「故に」として、総括して「此界成立の始なし」と結論づける。このように、大乘の中でも「法花本門」の教えを強調し、「されば」と前を

受け、過去を鑑み、さらに他の教えを自らの論に取り込んで「法花本門」の優位性を示し、「故に」と結論づける方法をとる。この論の展開は、仏教が諸説を内包することを証明する際に用いた論理構成と同じである。

この一話を図に表すと次のようである。

諸説の列挙の提示（和漢両朝並に仏家の所談相かはれり。）

神道

先和国神道の心……

儒教

次儒教の心は……

別記文（仏教で言い換えて説明）……

仏家よりこれをいはず……

道教

次に道教の心は……

別記文（仏教で言い換えて説明）……

仏家よりこれをみれば……

仏教（小乗）

次仏家に付て且小乗の心をもていはず……

私云……【抄本では別記文】……

（神道、儒教、道教の今までの思想を仏教で言い換えて説明。）

（今までのまとめとして仏教で置き換えている。）

仏教（法花本門の心） 次実大極妙の法花本門の心は

・法花本門を実大極妙とする

・「久遠実成」の提示

・時空（過去と、現在未来）の対比

・「されば」と前を受け他宗との対比

・「故に」として、「此界成立の始めなし」と結論づける。

(対比した例を順に受けながら総括する)

「故に本門の心よりみれば此界成立の始めなし。」と、全体を統括する

「次」をもって諸説を並列で列挙する体を装うが、前説を取り込む形で仏教で総括し、さらに末尾で全体を「法花本門」で統括し、末尾の説を強調する。全体が入れ子型で論が展開する。また、「法花本門」の説の論理展開は、諸説を総括する方法の縮図となる。

このような、前を受けて総括していく方法は、各説での叙述の仕方とも重なる。そしてそれは、諸説が解説的な文章であることと無関係ではないだろう。

諸説の冒頭は「…心」と、同じ形式で統一し、仏教で置き換える際には、「…いはゞ」「…みれば」と統一する。内容によって、表記のかき分け（本文と別記の形式）をし、構成を意識していることが明らかである。

三、卷一の他の説話

さて、このように、提示した説を取り込む形で論を進め、末尾を仏教で統括する方法は、卷一の他の説話も同様である。たとえば、同巻・第五「衆生」冒頭で、

有情の起をいふに又三国の心不同なり。

と、先と同じく三国の思想（和漢と仏教）で述べるところを明示する。そして、これも同じ並びで「先」として

先吾国神道の心は天神七代の御神……

と「吾国神道の心」の見解を述べる。その説に対して、別記の形式を用いて

昔天御中至尊と申奉るは、国常立の御事也。……

など本文の語釈の形で、語の説明として異説を提示し、神の系図、その出典を割注で示して、本文の解釈を補う。

この「神道の心」の説は、「吾国」＝「日本」にどのようにして人が生まれたのかを説く。神代から、皇室の系譜を説き、神が祖となつて、まず皇族が生まれたとする。そして人皇の時代に、王氏から、諸姓が生まれたことを説く。いわゆる日本種の種族が神、王氏の子孫であること、日本人の祖を説明する。そして

次震旦の元起をいはゞ、天地未分の時……

と、「次」の形式を用いて、震旦で三皇の世になるまでを述べる。それに対し、別記の形式で

私云、此事いまだ本書を見ず、陰陽の書にあり、追而可勘。

と解釈し、本文の読みを決定する。そのあと（本文として）

次に三皇の起りをいはゞ、盤古極長して後、即三皇あり。……

と、また「次」として区切り、三皇について典拠まで挙げながら、多様な説を列挙する。それらを全て一括して「これらはみな震旦の種族の祖なり。」とまとめる。ここでは震旦の種族の祖を説明する。ここまで、並列の体で、日本、震旦の国の種族の祖を述べた。次の「仏家の心」の説も

次仏家の心をもてこれをいはゞ……

と、形式上は、「次」で区切り、いままでと同じく並列での説の列挙を装う。しかし、内容は、「臍の中より金色千葉の蓮花生ぜり。……其中に人有て生ぜり。」と、「人」の誕生、「……其八子又天地人民を生ずと。」と人民の誕生、さらに、「八天子所生の子を衆生と云に付て三の故侍り。」と、その子たちが衆生であることを説くものである。そして、三つの理由を述べる。そこから、天竺の王の子孫についても述べるが、ここでは、一つの国の人種の祖ではなく、根本的な人類全体について説いていることに注目したい。いままでの和国（吾国）、震旦の説を否定はしないが、ここでの説はそれらを含み込んだ、説の根本、大前提になる。諸説と位相を異にする。

ここでも和漢仏の並びで、「次」の形を用い、並列を装い諸説を列挙するが、やはり、末尾を仏教に統括する形で論が展開する。そして、各思想の中で仏教の優位性を立証する。

卷一の他の説話も、このような方法を持つ。

第一「戲実」では、『枕草子』を意識した物づくしの体を取る。しかし、一つ一つの項目で、たとえば、「にくき物」として、

かみそりとに、そりくづのまじりたる、にくし。ひさうする物こふ人。心地れいならぬ時いねなんとするにおこす人。くりかけたる文を人のきてくり返しひきちらす。ねずみにさうしくはれたるは、いふはかりなくにくし。物しりがほして若きものが利口する。身の程しらずで物書をくも又にくし。

と、「にくし」物を連ねるが、その末尾の例は

仏計こそ万につけてにくみ思召御心はましまさね。其人命終入阿鼻獄と法花経に説給ひしは、にくませ給ふには侍らず。不信毀謗のとがをいませます計也。

と、仏教の例を出し、仏説でまとめる。また、仏が人々を「にくし」と思わない根拠として「法花経」を用いる。この一話は「ものづくし」で構成するが、それぞれの「ものづくし」の例の末尾を仏教で総括する。

「久しからぬ物」では、「春の雪」、「明行空の月のひかり」等の例を挙げ、末尾「諸経にとける弥陀等の仏の命も此経より見れば久からず。」と、法華経の優位性をあげる。

「ねもなき物」では、「うき草」、「とし」といふ草などをあげ、末尾「又法花経迹門の二乗成仏もねはなかるべし。」と、仏教で総括する。「法花経迹門」をあげ、「迹門」の「二乗成仏」を「ねのないもの」とし、「法花本門」の正当性を暗に述べる。この一話の最後の例は「うれしき事」であるが、ここでも、その末尾を仏教でまとめ「此経を持者をば是人於仏道

決定無有疑と説れたるこそ誠にうれしけれ」とする。やはり、仏教、なかでも「法花本門」の優位性をもって統括する。

第二「生死」は、世の流転、生死の法について、「逃れがたいもの」として仏教の諸説を提示して説明する。しかし、末尾で「只此経をたもつのみぞ、はなる、道には待ると、仏は説をき給へり。」として、法華経を重視する。それを導くのに「又は過去の大仙黄頭……」など、過去から鑑み、対比させる。この时空の対比の方法も先の例と同じ。

第三「仏法前後」は、「仏」と「御法」はどちらが先にできたかを問う話である。それについて各宗派の解釈を提示した後、「大乘源妙」の所談を「小乗」に対比させて述べ、「然るに法花本門の心は」として、法が前であると結論づける。さらに、「さて法花本門の心は」と、前を受けて、「能所」から、「仏」と「御法」の関係を考える。「これらは天台の釈の心なり」として、荆溪や、源清法師などの説を引いて列挙する。そして、末尾「此上に法花本門の心は」として、「故に三世環の如して能所本有也。」と「故に」と全体を総括する。仏教内の事柄については諸説、宗派の解釈を多く提示し、その中で、「本門の心」をもって、結論とする。小乗と大乘、過去と現在・未来、諸説と本門の説の対比によって、論を導く。

このように、巻一の各説話は諸説を並列の形で列挙し、末尾を仏教、または法花本門で、統括する方法をとる。以上のことから、標題を仏教を用いて統括するという構想が巻一全体を貫いていることがわかる。意図的に構成していることが明らかである。

四、説話の方法と巻の配列

それでは、先に確認した説話の方法と、巻の配列の方法の相関性はどうか。

巻一は、一・戯実、二・生死、三・仏法前後、四・国土ノ起和漢仏家、五・衆生、六・字源、七・詩初、八・歌起、九・教起の順に並ぶ。第一「戯実」を序として、第二でこの世界の流転の法（生死の輪廻）を説き、その生死から逃れる術と

して法華經を強調し↓第三で「仏」と「教」はどちらが先かを説き↓第四で国土の起り(但し、大乘(法花本門)では起はなしとする)について↓第五で生命、人類、そして、各国の種族の起りを説き↓第六・七、八と文化の起り(これを字の始めに梵字「天竺」、唐詩「震旦」、和歌「日本」と三国思想で、且つ和歌は、前の項、字・詩と順に發展してできた物と説く)を説き↓第九の仏の教え(如來說法)でこの巻を統括する。

一・戲実(物づくし)

序

二・生死

生死の法(輪廻)

三・仏法前後

四・国土ノ起——三国思想(和漢兩朝対仏家)

国土の起り

五・衆生——三国思想(和漢兩朝対仏家)

人類の起り

六・字源

文化

七・詩初——六、七、八で文化の起りを

八・歌起——三国で並べて提示

九・教起——全話八を引く。卷全体を統括

宗教(教え)

*卷全体として三国思想を意識しているか

発展

全ての「起」に仏教をからませながら、法、国、人類、文化の發展を變遷の形で記す。發展という意味で、順列が先になるに従い、先の内容を包括する。諸説を取り込む各説話の展開に通じる。

また、卷一全体を第九「教起」をもって仏教で統括する。第九「教起」は、仏の「教え」の始まりを説く。始めに「如

來說教の由来を尋ねれば」と問題提起をし、「…是小権の所談なり。」と小乗での説を提示する。その小権に対し、「実大本門の心は」と大乘の説を対比してあげ、「…能詮教また久遠なり。」と、教え自体が「久遠」であることを強調する。ここでも、小乗、大乘の対比から結論を導く。そして「故に其始て起ると云事をしらず、歌のことはり天地に先立てあるがごとし。」と「故に」と全て前を受けて総括する。先述述べた説話の方法をここでも踏襲する。また、ここで、前話の例、和歌・古今集の位置を仏教に喩えて説明した例を受ける。総括の箇所、前の喩えを用いることは、興味深い。そして、過去を尋ね、時代によつて教えが異なつたこと、いわゆる正法、像法では、説く教えが異なつたことを示す。「但法花経のみぞ上代の下世を兼て、正像末の三時ともに、利養を施し給ふ。」として、法華経の優位性を強調する。それを「しかはあれど、時と機によりて傍正なきにあらず。古今集のごとし。」と、前話の内容で喩えて説明する。前話を取り込んだ形になる。巻の最終話として総括する意図があるか。そして「又おなじ仏の御法なれ共、仏になる道はおほからず。只法花本門にかざり。」と前話を用いた喩えに対し、「法花本門」を強調する。

いままでも各説話で「法花本門」の優位性を説いてはいるが、ここでは、「法花本門」の教えを絶対的な物にと昇華させ、位相を異にする。続けて「歌の中にもと、なるはおほからざるがごとし。」と、前話の歌と仏教との関係をふまえて、前話をも解釈する。この一話は、「おなじ仏の御法なれ共、仏になる道はおほからず。只法花本門にかざり。」をもつて、巻一を統括する役割を持つ。

このように、巻の配列も、各説話の方法と同じであるといえる。よつて、巻一自体、大きな構想を持つて意図的に組み立てられているといえよう。

以上見てきたような方法をあてはめれば、他の巻の説話配列も納得がいくのではないか。たとえば、巻二、三は、巻二が王、巻三が皇太子、皇后、武將について述べ、対になっていると思われる。そして三国の順に配列されて、順も対である。しかし、巻三は、本朝の説話になると、突如として、「猿丸太夫」など歌人が出てくる。そして、「和泉式部・赤染衛

門」、「躬恒・貫之」など、両者の優劣を比べる説話になる。歌人の次が「舍利佛・目連」、「文殊・妙音」、「釈迦・弥陀」と、仏、その弟子たちとなる。この一見脈絡のないつながりも、巻一での各説話の方法、巻の構想を軸にしてみれば、末尾を仏教で締めくくり、全体のまとめとする意図をもって解釈できるのではないか。

五、まとめ

以上、巻一の各説話が、諸説を取り込む形で、末尾を仏教で統括していること、そして、とりわけ法花本門の思想をもって結論としていることを指摘した。そして、その方法が、巻一の説話配列と相関していることを確認した。

諸説を提示し、形態上、並列の形を取りながら、その実、仏教が、それらの思想を取り込んでいることを示し、その優位性を説く。仏教の宗派の諸問題では、「法花本門」の説を強調する論理構成をとる。他の思想に対しては仏教、小乗に対しては大乗、過去に対しては現在未来と、対比によって結論（法花本門の説）を導く。対比に一種のパターンが伺える。

「類書」の形式と類似するが、単に説を列挙するのみならず、末尾で解釈をもって統括し結論づける。その意味で単なる「類書」の形式とは異なる。

諸説の中で、選択しない説をも列挙することは、結論とする説の正当性を強調し、その説の信憑性を高める。しかも、それらを取り込んだ形で結論を導くことは、その説の優位性を立証する。

また、別記の形式を用いて、表記の仕方を区別する。本文の解釈、説明、異説の提示となることが多い。これも、各説話でみた、前を受けて、説明していく叙述の仕方と重なるものがある。別記文が一話の論理構成に深く関わっていることも確認できると思われる。

注

- (1) テクストは市古貞次校注『榻鳴晚筆』（三弥井書店）による。なお、私に傍線を付した。
- (2) 引用は『天理図書館善本叢書と書之部第二十七卷 日本書紀纂疏 日本書紀抄』による。なお、私に傍線を付した。
- (3) 引用は『神皇正統記 増鏡』（日本古典文学大系）による。なお、私に傍線を付した。
- (4) 引用は『塵添埴囊抄』（大日本佛教全書一五〇）による。但し、『塵添埴囊抄・埴囊抄』浜田敦・佐竹昭広編者（臨川書店）も参照した。
- (5) 引用は『神道体系 古典注釈編三 日本書紀註釋（中）』による。但し、送り仮名などは省略した。
- (6) 『新・佛教辞典』（増補）中村元監修（誠心書房）、『日本佛教語辞典』岩本祐（平凡社）による。また、『望月佛教大辞典』（増訂版）も参照した。

（博士後期課程四年）